

「しゅ❤️しゅごい❤️気持ちいいとこに・・・当
たってるう❤️」ルアーが溜まらず叫ぶ。

「あむう♡レロレロ♡むちゆくちゅう♡
・
・
・

ぬふ♡ぬふ♡ぬふ♡ぬふ♡
・
・
・
└

ルアーはデイープキスされたまま、正常位ピストンを食らっている。

「あああああああ！すごおんちゅうむちゅべろべろべろお」

「あ！イク♡！イク♡あつダメ♡イクツ♡！」

ルアーはそう言うとき、大きくのけ反った。

軽く達したようだ。

「すごい❤️このピストン・・すごい❤️」

カイのピストンのスピードが一気に上昇した。

「ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！」

（おどろき）

ン！
ハ
ン！
ハ
ン！
ハ
ン！
ハ
ン！
ハ
ン！
ハ

ン！パ
ン！パ
ン！パ
ン！パ
ン！パ
ン！パ
ン！パ
ン！パ

ン！
ッパ
ン！
ッパ
ン！
ッパ
ン！
ッパ
ン！
ッパ
ン！
ッパ
ン！
ッパ

凄まじいマシンガンファックが炸裂する。



「ぎやああああん♥しゅしゅしゅ・・・しゅご
おい♥・・・硬あああい♥・・・早ああい
いいい♥」

「すごい！すごいカイくん！！激ファック！激
ピストン！！ルアーちゃん、オマンコ大決壊だ

ああ♪」コトニの実況が響く。

カイの耐久力は凄まじく、全くピストンの勢いが緩まない。

（どひいゝ！いきなり挿入！ずるいよお★パンパンパン腰振り★すっげゝ★俺ならもう昇天しちゃってる勢いだああ★★★）

俺はカイの巨根をガツツリと啜えたルアーのオマンコを間近でガン見ながら、自身のモノを最大限に起立させていた。

「ああああああイクウ！またイクウ！❤️」とルアーは叫んだ。

「ぬぽん❤️！」カイがピストンを止め、巨根を引き抜くとルアーは勢いよく潮を吹いた。

「おひいいん❤️」

「ぶっしゅ❤️ぶっしゅうう❤️ぶしゅう❤️」

ルアーとカイの結合部をマジマジと見ていた俺は顔面にルアーの潮を食らってしまう。

「おんわああ★！！！」

俺は興奮のあまり、ヌルヌルのガマン汁を大量に漏らしてしまった。上目気味に白目を剥きかけているルアー。本気で達したのだろう。

だが、まだカイのターンは終わらない。

間髪入れず再度の激ピストンを繰り出すカイ。

「ぬほ！ぬほ！ぬほ！ぬほ！ぬほ！ぬほ……」

今度は浅めのゆっくりピストンだ。Gスポットを擦るようにゆっくりと擦り上げる。

「あへえ！！そ、それ！……きん、もち、い

いい❤️ダメえ❤️イクイクイクイクう❤️」

カイは残りの1分を浅めの激ピストンで攻めまくった。

「キンコーン」交代の合図になる。

「はい。ここで交代。次はエクセリオン様」

俺はカイがチンポを引き抜いたと同時にパンツをズリ下げ、自分のモノを一気にルアーにぶっこんだ。

「ずぶう★」

「はぁあん❤️」とルアー。

「おりやぁ!!!!」

俺はカイに負けじと一気にピストンする。

「パン！パン！パン！パン！パン！」

勢いよく突きまくる俺。

だが、興奮と快感のあまり、激ピストンはすぐに限界を迎えた。

「やんべえ!!!!俺っが★!いっちまう★!!
いっちやうう★!いくう★!」

「あーつと、エクセリオン様、すでに限界か

あ？カイくんのようにはいかないのかあ？」

コトニが笑いながら実況する。

「くんぬう★!いっちやうう★!やべええ!抜
かなきやぁぁぁ★!!」

俺は残り時間を4分も残して、チンポをルアー
のオマンコからひき抜いた。

「あん・もつとおお❤️」とルアー。



俺はチンポを抜くと、指でルアーのオマンコと
尻穴をいじくり、指マンで攻めた。

すでにぐちゃぐちゃになっているルアーのオマ
ンコは俺の指を一気に咥え込んだ。

「じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぷ♡」

イヤラしいまさぐり音がこだます。